

欧州の課題と可能性を知るための5冊

【評者】
 國學院大學専任講師
佐藤俊輔



二〇一〇年代を通じてヨーロッパは連続する危機の中にあつた。ユーロ危機、ロシアによるクリミア併合、欧州難民危機、そして英国の欧州連合（EU）離脱と相次ぐ困難の中、欧州内部でポピュリズムが広がりを見せ、E

Uの崩壊や分裂さえ取り沙汰された。二〇二〇年までに英国のEU離脱が一定の決着をみたとはいえ、その後も持続する危機の影響や新型コロナウイルスの新たな挑戦の中で、欧州はその道を模索している。

そのようなヨーロッパの現状を理解するためには、まず欧州が直面した危機について理解することが不可欠である。①は欧州が経験した複数の危機を、相互に連動し、多層性を持った「複合危機」として位置づけることに

- ① **欧州複合危機**
 ——苦悶するEU、揺れる世界
 遠藤乾・著
 中公新書、2016年
- ② **アフター・ヨーロッパ**
 ——ポピュリズムという妖怪にどう向き合うか
 イワン・クラステフ・著
 岩波書店、2018年
- ③ **現代ヨーロッパの安全保障**
 ——ポスト2014：パワーバランスの構図を読む
 広瀬佳一・編著
 ミネルヴァ書房、2019年
- ④ **アメリカとヨーロッパ**
 ——揺れる同盟の80年
 渡邊啓貴・著
 中公新書、2018年
- ⑤ **EUと新しい国際秩序**
 須網隆夫／21世紀政策研究所・編著
 日本評論社、2021年

より、個別的な現象としての危機の理解を超えて、それらの危機がもたらした欧州統合・EUに対する影響と含意を多面的・立体的に分析している。現在まで続くEUの正統性の課題や、それに留まらぬ危機の射程を理解する上で、数々の示唆が含まれた書物である。

この危機の深刻さを欧州人の実感を伴いながら描き出しているのが②である。ブルガリア生まれの政治学者である著者は、難民危機の影響、それによる東西欧州の分断、そして欧州の民主主義における混乱とポピュリズムの興隆を、その浩瀚な知識を用いて説明している。欧州におけるポピュリズムは今年予定されるフランスやハンガリーの選挙との関わりでも重要な問題であるが、本書では西欧と中欧のポピュリズムの相違が指摘される点も東欧出身の著者ならではの視点である。

そのように欧州の東側へと目を向け

ていくとき、やはり大きな問題であり続けているのが安全保障の課題である。③は、二〇一四年のロシアによるクリミア併合を転換点と位置づけ、同年までの欧州安全保障の枠組みとそれ以降の変容の分析から、現代欧州の安全保障の特質と行方を読み解いている。クリミア併合に関する動向やロシアの論理への考察とともに、近年のエストニア、西バルカン、トルコの動向、またそれらの変化に対するEU、北大西洋条約機構（NATO）の適応の試みに関する分析が立体的に織り合わされた研究書である。

また、こうした欧州安全保障の動揺をさらに深刻なものとしたのが、トランプ政権発足以降の米欧関係の悪化であった。二〇二一年にはバイデン政権が発足したが、こうした米欧関係の振幅の意味を客観的に捉えるには、歴史的な視点が必要である。④は米欧の同

盟関係をNATOに限定せず広義に捉え、二〇世紀初頭からトランプ政権期までの米欧関係の揺れ動きと綾とを通史として描き出した概説書である。リベラルな国際秩序の動揺が議論される現在、米欧関係の行方は日本にとって重要な意味を持っている。

⑤はこれらの危機と国際的な変化の中で、現在の欧州を捉える手掛かりとなる研究書である。本書は、英国離脱後のEUについて、域内格差やポピュリズム、法の支配の危機などの課題から、ユーロ制度改革、グリーンディール、新型コロナウイルス危機後のガバナンスなどのEU域内の新たな動向、そしてEUと中国、米国、日本との間の国際関係の展望まで、最新のEUの情勢を多面的に描き出している。多様な課題が指摘されるが、同時にそれに向き合おうとする欧州の姿から今後の可能性を見出すこともできよう。●